くると取まわし、漁村數多有り、むかしは櫻木數千本ありて、花の名高し、此故いく櫻島と稱す、國守の御茶屋も有なり、(中略)此島船にて海上をめぐれば、十里ありとて土人の言也、安永八年亥九月(○九月、翁草作十月、)朔日より地動き、海底鳴りて、潮鼎の涌るごとし、こはいかならんと、浦人さわぎおどろきて漁船に乘て、地方へ渡らんとせしに、海底より潮を吹上る事強くて、自おもふ方へよする事叶はず、覆らんとす、兎や角とする内、志滿ヶ嶽の頂より砂石を飛して、燃出る事夥敷、北方の漁村を埋む事百餘軒、死亡せるもの百六拾二人、痛つく者百餘人、鹿兒島を始め、近き所の濱浦の人は、二三里も逃去りぞく、(予櫻島の漁夫三四人に聞しに、その話し同じ、)二十日計強く燃て、其後は煙り計立て今のごとし、又其頃海底より土砂吹上て、島となる所大小七ツ、大なるは周く二十町餘、小なるは一二丁、年々に高くなると、浦人の物語りき、(○中略)すべて島の模樣、入海の眺望、勝景の地也、(○中略)眞言律宗淨光寺といへるは、小高き所にて、此境内より櫻島を見れば、風景一しほよし、

〔續日本紀 二十五 淳仁〕天平寶字八年十二月、是月、西方有聲、似雷非雷、時當大隅薩摩兩國之堺、煙雲晦冥、奔電去來、七日之後、乃天晴、於鹿兒島信爾村之海、沙石自聚化成三島、炎氣露見、有如冶鑄之爲形勢、相連望以四阿之屋、爲島被埋者、民家六十二區口八十餘人、

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕邊要國(○中略)陸奥　出羽　佐渡　對馬　多。褹。(○中略)

併分國國(○中略)　大隅(中略)天長元年月日、停多褹島、隷大隅國、

〔書言字考節用集 一乾坤〕。多。褹。島(舊事記作多褹、隅州附庸、)

〔倭訓栞 中編十三 多〕たねがしま　日本紀に多禰島、續日本紀に多褹島、武備志に種子島、唐書に多尼、全浙兵制に種島に作れり、今大隅の國に屬り、南島志に琉球の内とせり、

〔南浦文集 上〕鐵炮記(代種子島久時公)

隅州之南有一島、去州一十八里、名曰種子、我祖世々居焉、古來相傳、島名種子者、此島雖小、其居民